

## 第一章 マアレイの亡霊

先ず第一に、マアレイは死んだ。それについては少しも疑いがない。彼の埋葬の登録簿には、僧侶も、書記も、葬儀屋も、また喪主も署名した。スクルージがそれに署名した。そして、スクルージの名は、取引所においては、彼の署名しようとするいかなる物に対しても十分有効であつた。

老マアレイは戸の鉾のように死に果てていた。

注意せよ。私は、私自身の知識からして、戸の鉾に関して特に死に果てたような要素を知っていると云うつもりではない。私一個としては、むしろ柩の鉾を取引における最も死に果てた鉄物と見做したのであつた。けれども、我々の祖先の智慧は直喩にある。そして、私のような汚れた手でそれを掻き素すべきではない。そんなことをしたら、この国は滅びて仕舞う。だから諸君も、私が

語氣を強めて、マアレイは戸の鉾の様に死に果てていたと繰り返すのを許して下さいましょう。

スクルージは彼が死んだことを知っていたか。もちろん知っていた。どうしてそれを知らずにいることが出来るよう。スクルージと彼とは何年とも分らない長い歳月の間組合人であった。スクルージは彼が唯一の遺言執行人で、唯一の財産管理人で、唯一の財産譲受人で、唯一の残余受遺者で、唯一の友達で、また唯一の会葬者であった。そして、そのスクルージですら、葬儀の当日卓越した商売人であることを失うほど、それほどこの悲しい事件に際して気落ちしてはいなかった。そして、万に一つの間違いもない取引でその日を荘厳にした。

マアレイの葬儀のことを云ったので、私は出発点に立ち戻る気になった。マアレイが死んでいたことには、毛頭疑いがない。この事は明瞭に了解して置いて貰わなければならない。そうでないと、これから述べようとしている物語から何の不思議なことも出て来る訳に行かない。あの芝居の始まる前に、ハムレットの阿父さんは死んだのだということも充分に呑み込んでいなければ、阿父さんが夜毎に、東風に乗じて、自分の城壁の上をふらふらさまよい歩いたのは、誰か他の中年の紳士が文字通りにその弱い子息の心を脅かしてやるために、日が暮れてから微風の吹く所へ——まあ例えればセント・パウル寺院の墓場へでも——やみくもに出掛けるよりも、別段変ったことは一つもない。スクルージは老マアレイの名前を決して塗り消さなかった。その後幾年もその名は倉庫の戸の上になそのままになっていた。すなわちスクルージ・エンド・マアレイと云うように。この商会はスク

ルージ・エンド・マアレイで知られて居た。新たにこの商会へ這入つて来た人はスクルージのことをスクルージと呼んだり、時にはマアレイと呼んだりした。が、彼は両方の名に返事をした。彼はどちらでも同じ事であつたのだ。

ああ、しかし彼は強欲非道の男であつた。このスクルージは！ 絞り取る、振じ取る、掴む、引っ掻く、かじりつく、貪欲な我利々々爺であつた！ どんな鋼でもそれからとんと豊富な火を打ち出したことのない火燧石のように硬く、鋭くて、秘密を好む、人づき合ひの嫌いな、牡蠣のように孤独な男であつた。彼の心の中の冷気は彼の老いたる顔つきを凍らせ、その尖つた鼻を痺れさせ、その頬を皺くちやにして、歩きつきをぎごちなくした。また目を血走らせ、薄い唇をどす蒼くした。その上彼の耳触りの悪い嘎れ声にも冷酷にあらわれていた。凍つた白霜は頭の上にも、眉毛にも、また針金のような顎にも降りつもつていた。彼は始終自分の低い温度を身に附けて持ち廻つていた。土用中にも彼の事務所を冷くした、聖降誕祭にも一度といえどもそれを打ち解けさせなかつた。

外部の暑さも寒さもスクルージにはほとんど何の影響も与えなかつた。いかな暖気も彼をあたためることは出来ず、いかな寒空も彼を冷えさせることは出来なかつた。どんなに吹く風も彼よりは厳しいものはなく、降る雪も彼ほどその目的に對して一心不乱なものはなく、どんなに土砂降りの雨も彼ほど懇願を受け容れないものはなかつた。険悪な天候もどの点で彼を凌駕すべきかを知らな

かった。最も強い雨や、雪や、霰や、霰でも、ただ一つの点で彼に立ち優っていることを誇る事が出来るばかりであった。それはこれ等のものは時々どんと降って来た、然るにスクルージには綺麗に金子を払うと云うことは金輪際なかった。

何人もかつて往来で彼を呼び留めて、嬉しそうな顔つきをして、「スクルージさん、御機嫌はいかがですか。何日私の許へ会いに来て下さいますか？」などと訊く者はなかった。乞食も彼に一文遣つて下さいと縋つたことがなく、子供達も今いつですか？と彼に訊いたことがなかった。男でも女でも、彼の生れてから未だ一度も、こうこういうところへはどう行きますかと、スクルージに道筋を訊ねた者はなかった。盲人の畜犬ですら、彼を知っているらしく、彼がやって来るのを見ると、その飼主を戸口の中や路地の奥へ引つ張り込んだものだ。そして、それから「丸つ切り眼のないものはまだしも悪の眼を持っているより優しですよ、盲人の旦那」とでも云うように、その尾を振つたものだ。

だが、何をそんな事スクルージが気に懸けようぞ！ それこそ彼の望むところであった。人情なぞは皆遠くに退いておれと警告しながら、人生の人ごみの道筋を押し分けて進んで行くことが、スクルージに取つては通人の所謂『大好物』であった。

ある時——日もあるうに、聖降誕祭の前夜に——老スクルージは事務所に坐つていそがしそうにしていた。寒い、霜枯れた、噛みつくような日であった。おまけに霧も多かった。彼は戸外の路地

で人々がふうふう息を吐いたり、胸に手を叩きつけたり、煖くなるようにと思つて敷石に足をばたばた踏みつけたりしながら、あちらこちらと往来しているのを耳にした。街の時計は方々で今し方三時を打ったばかりなのに、もうすつかり暗くなつていた。——もつとも終日明るくはなかつたのだ。——隣近所の事務所窓の中では、手にも触れられそうな鳶色をした空気の中に、赤い汚点の様に、蠟燭がはたと揺れながら燃えていた。霧はどんな隙間からも、鍵穴からも流れ込んで来た。そして、この路地はごくごく狭い方だのに、向う側の家並はただぼんやり幻影の様に見えたほど、戸外は霧が濃密であつた。どんよりした雲が垂れ下がつて来て、何から何まで蔽い隠して行くのを見ると、自然がつい近所に住んでいて、素敵もない大きな烟の雲を吐き出しているんだと考える人があるかも知れない。

スクルージの事務所の戸は、大桶のような、向うの陰気な小部屋で、沢山の手紙を写している書記を見張るために開け放しになつていた。スクルージはほんのちつとばかりの火を持つていた。が、書記の火はもつともつとちよつぽりで、一片の石炭かと思える位であつた。でも、彼は、スクルージが石炭箱を始終自分の部屋にしまつて置いたので、それを継ぎ足す訳に行かなかつた。書記が十能をもつて這入つて行くたんびに、きつと御主人様は、どうしても君と僕とは別れなくちやなるまいねと予言したものだ。それが為に、書記は首に白い襟巻を巻きつけて、蠟燭で煖まろうとして見た。が、元々想像力の強い人間ではなかつたので、こんな骨折りをしても甲斐はなかつた。

「聖降誕祭でお目出とう、伯父さん！」と、一つの快活な声が叫んだ。これはスクルージの甥の声であった。彼は大急ぎで不意にスクルージの許へやって来たので、スクルージはこの声で始めて彼が来たことに気が附いた位であった。

「何を、馬鹿々々しい！」とスクルージは言った。

彼は霧と霜の中を駆け出して来たので、身体が暖まって、どつからどこまで真赤になっていた。スクルージのこの甥がですよ。顔は赤く美しく、眼は輝いて、ほうほうと白い息を吐いていた。

「聖降誕祭が馬鹿々々しいんですって、伯父さん！」と、スクルージの甥は云った。「まさかそう云う積りじゃないでしょうねえ？」

「そういう積りだよ」とスクルージは云った。「聖降誕祭お目出とうだって！ お前が目出たがる権利がどこにある？ 目出たがる理由がどこにあるんだよ？ 貧乏しきっている癖に。」

「さあ、それじゃ」と甥は快活に言葉を返した。「貴方が陰気臭くしていらっしゃる権利がどこにあるんです？ 機嫌を悪くしていらっしゃる理由がどこにあるのですよ？ 立派な金持ちの癖に。」

スクルージは早速に巧い返事も出来かねたから、また「何を！」と云った。そして、その後から「馬鹿々々しい」と附け足した。

「伯父さん、そうぶりぶりしなさんな」と、甥は云った。